

ビデオ教材の可能性

— I C U初級日本語映像教材“イメージ”（試用版）をめぐって—

山下早代子

I はじめに

I C U初級日本語教科書編纂と並行して、1991年、ビデオ教材“イメージ”（試用版）が制作された（作成経緯報告は山下、1991を参照）。現在、市販の初級映像教材としては国立国語研究所の企画・制作による『日本語教育映画基礎編』を始めとして、『日本語（JAPANESE FOR BUSY PEOPLE）』（国際日本語普及協会）、『ヤンさんと日本の人々』及び『ヤンさんと日本の人々—続編』（国際交流基金）、『ビデオ講座日本語』（氏家研一）、『誰でも教えられる日本語：見る・聞く・話す』（NHK放送研修センター）などがある。映像教材の有効性の認識、技術の進歩、制作経費の低廉化などに伴い、現在、上記以外の機関でも続々とビデオ教材を制作中である。

“イメージ”（試用版）では、教科書に提示された文法項目に従って、それが話される場面を設定して複数の教師がシナリオを書いた。予定されている99シーンのうち、できあがった33のシーンには、一般の文字教材としての教科書に現れる「会話」部分の代わりになるような形式のものが多く出てきた。I C Uビデオ教材をどのような理念のもとに作成するのか、どのような方法で使用するのか、教室活動の中でどのように位置づけるのかといったことについて、分担作成した教師の解釈がまちまちであったため、完成した“イメージ”は不統一な印象を与えたり、また使いにくいものが出来た結果にもなった。現在ある“イメージ”のヴァージョン・アップをはかり、まだ完成されていない“イメージ”をこれから作成するに当たって、上記の事項を振り返って考察し、今後の展望につなげる。以下、II. ビデオ教材の役割、III. 外国語授業の中での位置づけ、IV. ビデオによる教室活動、V. 今後の課題—ビデオシラバス、の順に述べる。

II. ビデオ教材の役割

1) 言語的教材としてのビデオ

一般に、教育内容を具現化したものである教材は、言語的な教材と非言語的教

材に分けられる（名柄、1991；山下、1992）。ビデオは言語的な教材の中の映像教材の下に分類される。映像教材以外の言語的な教材には文字教材（教科書、文字カード、フラッシュカードなど）、および音声教材（テープ、放送教材、レコードなど）がある。非言語的な教材は、絵、写真、スライド、実物、などを挙げることができる。

Lonergan (1984) は、現在外国語学習で一般的に用いられている会話の提示の方法として、a)文字 (printed texts)、b)音声教材 (audio recordings)、c)映像教材 (audio-visual recordings) の3つを挙げているが、会話に限らず、言語を提示する手段としてこの3つのタイプがあると言える。Lonergan は文字によるテキストは永続的であり、構文、言葉の形態などの言語的要素を学生が時間をかけて学習するのに向いているが、実際の会話がどのように行われているか、という "how" の部分を文字で表すことは難しいと述べている。音声教材については、発音 (phonetic) と声の調子 (prosodic) --高さ、リズム、速さ、大きさなど--を知ることができるが音声は瞬間的に変わっていくので、学習者は文字のテキストのようにはもどって確認できない。そのため、ほとんどの語学授業の場合、音声教材は文字による会話文も併せて読むことが（あるいは書くことが）多く、文字による助けなしに音声だけで会話を理解することは難しい。一方、映像教材は、音声教材の利点に加えて、視覚的手段を用いることにより、非言語的 (paralinguistic) な要素も情報として含まれ、状況が一目でわかる。それが学習者の理解に役立ち、また、登場人物の心理学的な側面（感情、表情、気質など）も映像によって表すことができ、内容の理解に役立つと述べている（非言語についてはさらに後述）。外国語教育とは切り放せない文化、習慣、生活の様子も、映像教材であれば、非常にはつきりと提示できることは言うまでもない。

このように、映像教材には、文字教材、音声教材にない利点があるわけだが、映像教材の中でも特に“ビデオ”が近年、外国語教育の中で多用されるようになった背景には、教室での扱いやすさが挙げられるだろう。テレビと再生装置があれば教室ですぐに使用できること、教育目的に合わせて、音声と画像を別々に操作することも可能であり、ポーズ機能を使えばいつでも画像を静止させて確認することができる。低価格でビデオが入手可能になったことも大きい。

2) ビデオは何を可能にするか

a. 言葉を現実に近い場面の中で意味のある自然な形で提示する；

Allan (1985) はビデオが「現実の生の生活の一部を撮し出す」と述べている。

映像の力によって、現実でありそうな場面 (realistic situation) で、学習者の身近にいそうな出演者が会話をします。これは文字によるテキストや音声教材が現実的である必要がなく、状況設定の細かい配慮もなくてかまわないということと比較すると大きな違いである。自然な場面の中で新しい言語の形を提示することができるというのはビデオの大きな利点の一つであろう。

b. 学習意欲を高め、表現活動への動機づけを強化する；

上記 a. で述べたようにビデオは言語の話される状況を理解しやすくし提示する。従って視覚的に記憶されやすく、結果的に学生の学習意欲を高め、表現活動への動機づけ強化につながるといえる (Lonergan, 1984; Tomalin, 1990a; Stempleski, 1990)。表現活動への動機づけとは具体的にどのようなことをいうのだろうか。完成している ICU の“イメージ”を例にして考えてみる。

L13 「母の日」の会話部分を見てみると、会話は次のように行われる。

“イメージ” L13 「母の日」

A : お母さん、今日は掃除をしなくてもいいんです。

B : えっ。

A : 洗濯も料理もしなくていいんです。何もしなくてもいいんです。僕にまかせて下さい。

B : どうしてですか。

A : 今日は、「母の日」です。

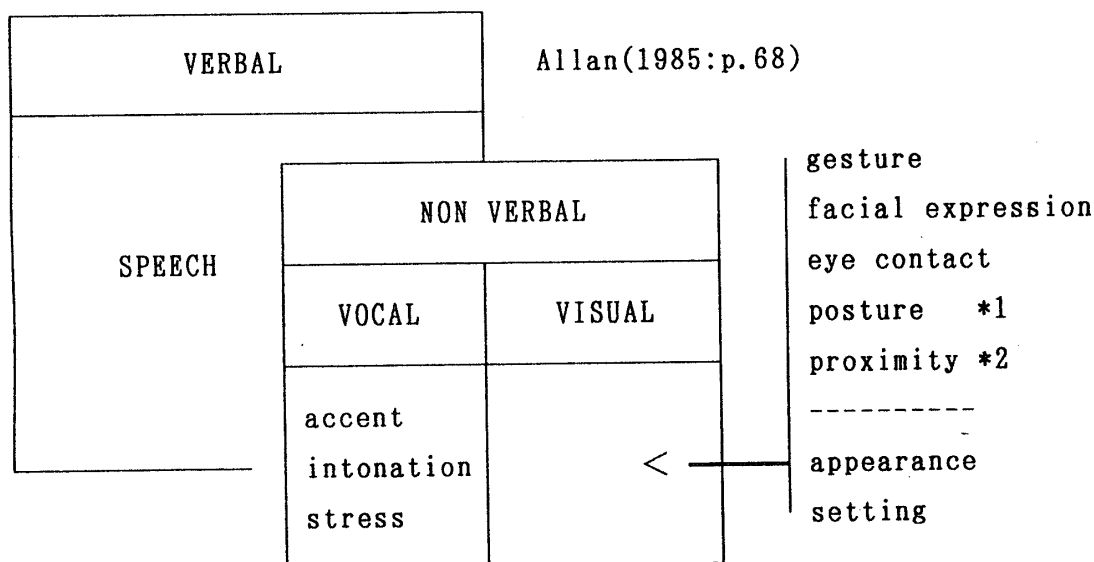
B : そうでしたね。じゃ、お願いします。

これは、文字で見ると少し変である。親子がずいぶん丁寧な言葉を使用している。しかしビデオで見ると不自然ではない。なぜなら A が留学生で、お母さんというのはホームステイの家のお母さんという状況が一目で理解できるからである。そこから学生は自分に身近な話題としてこれを捉え、このレベル (J2) で十分に可能な表現活動を行うことができる。たとえば、「この女の人は留学生のお母さんですか。お母さんはいつも何をしていますか。この留学生はいつもこの家で何をしますか。掃除をしますか」というような質問を教師が発することもできるし (あるいは学生同士で行うこともできる)、学生からは、「日本では母の日に何をしますか」というような文化的な話題に関する質問がでるだろう。「留学生の国では母の日に何をするのか、父の日はあるか」などというような話題に発展させることもできる。この“イメージ”では文法導入項目として“～しなくてい

い”を学習することになっているが、このようにして、ビデオでは自然な状況でその形が使われる場面を紹介しながら、意味のある表現活動へと導いていくことが可能である。

c. 非言語 (paralinguistic elements) を言語とともに提示する；

実際の会話を考えた時、音声だけの会話というのはラジオや電話以外考えられない。通常対話では必ず話者と聞き手が同じ場所において、状況を視覚的にとらえながら話の内容を理解していく (Cooper, 1990)。Tomalin (1990 a) は非言語を register という言葉で定義し、顔つき、目の表情、ゼスチャー、着るもの、場面の状況などを含めて説明している。Allan (1985) は、顔を見ながら (face to face) コミュニケーションをする場合に使う手段を次のようにまとめている。



*1 態度など

*2 距離 (例えば話し合っている人の距離) など

このほか、非言語的要素として会話をする人の性別、年齢、地位、職業など、あるいは、習慣的・社会的動作などもあるだろう。日本の社会では挨拶には必ずお辞儀が伴い、そのやり方も軽い会釈から目上の人に対する深いお辞儀まで様々で、そういったことまで含めてたくさんの非言語的要素が現実の会話においては関わっている。言葉の形式以外に、そのような非言語が総合的に関わってコミュニケーションが行われているのである。ビデオはそのような要素を他のどんな教材よりもはつきり提示することができる。

d. 学習指導項目を強調することができる；

ビデオの特徴にカメラワークがある。ロングショットやクローズアップの手法を用いて、学習者を指導したいものに注目させることができる (Tomalin, 1990 b)。L 3 2の「タッチの差」ではバス停の遠景 (ロングショット)、走ったら間に合うかもしれない・・・と走り出すミディアムショットのところ、もう少しだったのに、残念だったわね・・・という出演者のがっかりした顔のクローズアップなどカメラアングルを使い分けることによって、言語形式に合わせて学習者の注意を促すことができる。L 2 2の「自動ドア」でも、“イメージ”自体のシナリオは自動ドアの前に立ってじっとしている人に向かって「そこを押すと開きますよ。」と言う1文だけである。ここは言語学習的には「～と～」と自動詞の用法を教える大事なところであるが、ドアを押す位置のクローズアップで比較的容易に状況を説明することができる。もちろん、不用意に撮影された映像は逆に、教師の方で意図していなかったマイナスの作用も引き起こす事は十分考えられる (杉山、1987)。

スローモーションやスーパーインポーズ (説明の文字を入れる)、ウィンドー機能なども目的によって有効な手段になる。たとえば、“イメージ” L 1 4「人口密度」は現在グラフを指して「N町は一番人口密度が高いです。」と説明しているが、映像効果を最大限に生かすとするれば、画面を斜めまたは縦に半分に割って、一方に棒線グラフを、一方に団地の写真などを入れることも可能であり、そのようにすればさらに“人口密度が高い”ということがよく学習者に理解できる。

e. 学習者を文化や習慣、行事などに親しませることができる；

言語形式が使えるようになるだけではその国の言葉がわかったとはいえない。お互いの文化を比較し、共通点、相違点を認識し、価値観や行動様式を理解してはじめて言語を本当に習得したといえる。“イメージ”の中ではL 2 9、「鈴木道場」で古い日本の建物、昔ながらの両開きの玄関のある柔道場を受身形の提示“建てられた”に使い、反対に新しい洋間の部屋の中をL 1 3「母の日」で提示することによって、学習者が日本の家屋の様式に関心をもてるように配慮してある。「日本語教育映画基礎編」(国立国語研究所)では、各巻の場面や行動が日本事情的トピックとして一覧表にまとめられているが(日向・清田、1983)、ビデオ教材を作る時、言語形式だけでなく、その背景となる文化や習慣を体系的に組み込んでいくことは重要な作業の一つである。

Ⅲ. 外国語授業の中での位置づけ—初級の場合

一口にビデオといっても、語学教材用として特別編集されたものから、商業用のもの（ニュース、特集番組、コメディ、ドラマ、コマーシャル、音楽ビデオ）まで色々ある。どんなビデオを使うかは、学習者のレベル、ニーズ、モチベーションによって決まってくるであろう。初級用としては、かなりコントロールされた外国語授業用特別編集ビデオが一般的である。現在市場にある日本語ビデオ教材初級用はすべてこのタイプであると言える。

Stempleski & Tomalin (1990a) は、初級のクラスにおいてこそビデオの使用を最優先するとよいと述べている。それはビデオが学生の学習意欲を高め、言語理解を助けるからである。Allan (1985) は、ビデオで扱うものが文字によるテキストや音声教材と比べて現実色が濃いので、あまりレベルに合わせ過ぎた表現では不自然で、ある程度自由な表現が混ざるのはやむを得ないと述べる一方、初級でビデオを使用する時のポイントとして「制限」(control)の必要を挙げている。言語形式、語彙の量の制限はもちろん、場面(context)も一番はつきりしたものがよく、すべてを簡単に、反復ができるような形にする必要がある、と述べている。Allan はまた、初級クラスのためにビデオが一番貢献できることは、現実に近い場面とその中で使われる言語を示すことにより教室と現実社会を結び付けることであると述べている。

初級の一回の授業の中でどのようにビデオを使用したらよいかについては、Stempleski が Wood (1990) との対談の中で次のような原則を述べている。

初級授業のためのビデオ > (Wood, 1990 より：筆者訳)

(1) Show Short Sequences (短くすべし) :

ビデオは映像と音声他多様な要素の混ざった密度の濃いものなので "bite-sized" chunks (かみくだける位の短いまとまり) で提示する必要がある。2～3分の長さの映像で1時間の授業のための十分な内容を含む。

(2) Allow for Repeated Viewing (繰り返し見せる) :

学習者が見て、聴いて、状況や登場人物を理解するためには、数回は繰り返し見せる必要がある。

(3) Encourage Active Viewing (能動的な視聴を促す) :

受身的な視聴ではなく、色々な活動を通してビデオの提供するもの—例えば全体的な内容、文化の違い、ゼスチャー、語彙あるいは構文などを理解させる。

シラバスの中でどのようにビデオを扱うかは大きな問題で、教師のそれぞれの考え方や、その時の学習者の目的などによっても違って来るだろう。中心になる教科書と併せて使用する場合に、ある1課の中で新出構文などをビデオで扱う場合は、始めにその言語形式が使用される場面を提示してあとの理解の助けとするか（ICUの“イメージ”は当初この目的で作られた）、あるいは一番最後のまとめにもってきて、学習者の理解や定着の有無を見たり発展的な教室活動に結び付けていくことにビデオを使用するのか、それとも途中で入れるのか、色々な方法が考えられるだろう。

IV. ビデオによる教室活動

ビデオは内容理解、聴解のための副教材と考えられがちで、映像の中で扱われる言語形式を理解することが最終目標だと考える教師も少なくなく、そのため課題や練習問題として作成されたものはクローズ形式（穴埋め式の、聞き取るべき単語を聞いて記入するような練習）のものが多し。しかし、ビデオはそのような受け身の作業が中心になるものではなく、もっと学生が能動的に係われるものである。ビデオによって、聞く、話す、読む、書くなど全ての言語技能をのぼす活動に発展させることができる。それらの言語技能をのぼすために、教師主導ではなく学習者に積極的な視聴を促すような活動（Active viewing）（Lonergan, 1984）が強調されている。

ビデオの短いシーンを見ることによって、言語技能をのぼす具体的な方法は色々論じられているが、Active viewing のための方法として Tomalin (1990b) の10の技術（Techniques）が参考になるので、簡単に紹介する。

語学教育ビデオ10の技術＞（Tomalin, 1990b より：筆者訳）

(1) Silent Viewing（消音再生）：

映像だけを見て、内容の類推をさせ、音声理解への期待を持たせる。ビデオは内容の濃い（dense）教材なので、音と映像を同時に提示した時、学習者には情報過多になる時がある。そのような場合に一方（映像）だけを提示する。この方法は新しい課の導入時、あるいは応用会話の時間などに行ってもよい。

(2) Freeze Frame（ポーズ）：

ポーズボタンを押すことにより映像を止め、何が写っているか、人物は何をしているか、何と言っているかなどを話し合う。写っているものの名前を確認す

ることによって、新出単語の提示あるいは確認にもなるし、「なぜ」というような質問から活発な議論に導くことも可能である。

(3) Roleplay (ロールプレイ) :

映像で提示されているように台詞を言い、演技する。この場合、非言語要素もビデオの登場人物がやるようにまねさせることができる。

(4) Behavior Study (行動観察) :

ビデオの中の人々の非言語的行動について話し合う。学習者の文化と違う点に気づかせることが目的で、まねをすることが目的ではない。

(5) Prediction (予測) :

ビデオを途中で止め、次に何が起こるか、登場人物が次に何を言うか当てさせる。話の結末を予想させたり、タイトルを当てさせたりする。そのような質問により、活発な発話を促す。

(6) Thinking and Feeling (心理を読む) :

登場人物が何を考えているか、感じているか、自分だったらどうするか、などを登場人物の台詞や表情から類推し、述べる。

(7) Sound Only (消画像再生) :

(1)の消音再生の反対で、画面の方を隠して学習者が見られないようにし、映像を想像させる。音声から想像した物や人を自分の言葉で描写して述べることにより話す力を訓練する。

(8) Watchers and Listeners (役割分担) :

クラスを2つに分け(2つの教室を用意する)、一方のグループは音を消して映像だけを見、他方は映像を隠して音声だけを聴く。そのあと、両者がいっしょになり、お互いが知った情報を交換し(報告し)、インフォメーション・ギャップをうめる。

(9) Telling the Story (話の全容) :

ビデオの終わりだけを見て、全体の話の内容を類推する。口頭で発表してもよいし、書いてもよい。ビデオの始めの部分だけを見せて、続くストーリーを言わせたり、書かせたりしてもよい。

(10) Culture Comparison (文化比較) :

文化に焦点を当て、違いを話し合う。

これら10の技術の使い方は様々だが、いずれも言語の4技能(特に話すこと)を伸ばすことが意図されている。このほかに、ブレイン・ストーミング、プロジェクトなどがある。教師のアイデア次第でもっと色々な方法があるだろう。

V. 今後の課題ービデオシラバス

Ⅱ～Ⅳで見てきたように、ビデオ教材は単に言語形式を提示するだけではなくさまざまな可能性を含んでいる。映像という手段を語学教育に生かすためには、また、ICUの初級教科書の“イメージ”教材が、教科書本文と同じような重さをもって作成されるためには、教科書のシラバスを共有するのみならず、さらにビデオ教材独自のシラバスを教科書本文シラバスに重ねる必要がある。

“イメージ”シラバスの試案としてL3を取り上げてみよう。L3の“イメージ”は初級のクラスを約20コマ（1コマ70分）終了した段階で使用することになる。教科書の文法シラバスから言うと、動詞が初めて出て来る大切なところである。

L3のシナリオ：

A：日曜日にどこへ行きますか。

B：いつも、公園へ行きます。

A：散歩をしますか。

B：いいえ。

A：じゃあ何をしますか。

B：トランペットを吹きます。

L3の“イメージ”シラバス試案：

	話題	機能	登場人物	場面*1	文化	非言語要素
L3	日曜日の過ごし方	尋ねる ↓ 答える	男：18歳 学生 女：18歳 学生	喫茶店 ↓ 公園でトランペットを吹く場面*2	初めてのデート	目・表情・顔つき 手・姿勢・髪型 服装・アクセサリ 価値観・習慣 座り方 距離 ジェスチャー あいづち イントネーション

*1 シラバスには季節も含める必要がある（伊豆山、1987）。

*2 作成済みの“イメージ”L3には公園の場面はないが、喫茶店のシーンに重ねて入れ込むことが可能である。

教室作業

- ・ビデオを見せる前、日曜日に何をするか話し合わせておく
- ・ビデオを見せた後、状況（場所・登場人物の関係など）を説明させる
- ・消音にして、映像に合わせて台詞を言わせる／演技させる
- ・設定を変えて（例えば“お見合い”）、ロールプレイをさせる
- ・デートの約束の簡単な手紙を書かせる／メモを書かせる
- ・電話で約束をさせる

このシナリオの場面での、敬体による会話を見ると、親しい友達同士の会話とは考えにくい（実は、日本語学習者のこの段階では常体、つまり「どこへ行くの？」「公園へ行くんだ。」というような形をまだ提示できないという事情がある）。従ってそのような事情を含んで、既成の“イメージ”は「初めてのデート」という設定になった。

上記の“イメージ”（通常J1レベル用）をある時、J3レベルで、初級文法の復習として見せた。シナリオが男の子の「トランペットを吹きます」で終わったあと、相手の女の子が「へえ」といって下を向き、コーヒーカップを口元に持っていく場面で会話が切れるため、これを見た学生達は、

- ・この女の子はこの男の子が好きではない。
- ・この女の子は音楽に興味がないのではないか。
- ・この2人はもうデートをしないだろう。
- ・この女の子が男の子を好きだったら、何といっただろう。

というような会話に発展した。これらは、文字による会話シナリオ、あるいはテープによる音声教材からは決してでてこない学生からの反応である。ビデオ教材は、常識的なやりとり（既成の会話テキストだと、文字のみで理解しなければならないので、トランペットを吹く代わりに散歩をしたりジョギングをすることになるだろう）をちょっとひねって、学生の予測をかわしたり、学生のイメージを膨らませるような工夫をも盛り込みやすい。このシーンは使用されている言語形式から言うと初級用であるが、可能ならば、トランペットをなぜ公園で吹かなけ

ればならないのかというところを捉えて、近所への音を気遣う日本のアパート事情を話し合うこともできる。最後の仕上げは、デートを想定したロールプレイするのが最も適しているように思える。

このように、ビデオ教材に何を含めるか、クラスでどのように使用するか、どのように発展させるか、ビデオ教材全体で場面や話題、非言語要素などをどう割り振るかということ踏まえてのビデオシラバス作りは、ビデオ教材を作成していく上での重要なステップと考えられる。

ビデオ教材制作には、時間と経費がかかる。わずか30秒ほどの、短い“イメージ”の1シーンが完成するまでに、その何百倍もの時間と手間、費用がかかっている。(山下、1991参照)。しかし、ビデオ教材が有効に使われた時、文字教材、音声教材では得られない、さまざまな情報を学生達は得ることができる。

最後に課題として残るのは、制作されたビデオと教科書との関連である。現在の試用版では、教科書の課の始めの部分に、イラスト付きでシナリオが載せてある。教科書の中の会話の位置づけがはっきりしていないため、これを会話のクラスで、時にはビデオを見せずに使うコースも多い。しかし、本稿でも考察してきたように、ビデオ教材は従来の教科書の「会話」とは異なり、映像があってはじめて生き、さまざまな教室活動に発展させられるものである。そのところをもう一度押さえて、ビデオ教材の位置づけを検討する必要がある。

参考文献：

- 伊豆山敦子ほか(1987)「ビデオ教材“日本の四季”編集報告」『映像教材による教育の現状と可能性』国立国語研究所 pp.67-81.
- 杉山太郎(1987)「学習者[迎合]型映画使用法」『映像教材による教育の現状と可能性』国立国語研究所 pp.90-98.
- 名柄 迪 ほか(1991)『実践日本語教授法』バベル・プレス
- 日向茂男・清田潤(1983)「日本語教育映画基礎編の完成について—映像教材の可能性と展望—」『日本語教育』51 pp.118-130.
- 山下早代子(1991)「映像教材“イメージ”—作成の目的と経過、使用報告—」『ICU日本語教育研究センター紀要』1 ICU pp.74-86.
- (1992)「教育教材・教具論」『日本語教師読本シリーズ』2 アルク pp.91-94.

- Allan, M. (1985). Teaching English with video. Essex: Longman.
- Cooper, R. (1990). "Language teaching, video, and television literacy." The Language Teacher, 11, 15-16.
- Lonergan, J. (1984). Video in Language Teaching. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stempleski, S. & B. Tomalin. (1990). Video in Action, Recipes for using video in language teaching. New York: Prentice Hall.
- Tomalin, B. (1990a). "What does video offer." The colloquium, Video Challenges for the Nineties. JALT '90, Omiya.
- Tomalin, B. (1990b). Video in the English Class, Techniques for successful Teaching. (Booklet with video). BBC/Meynard.
- Wood, D. (1990). "Interview: Susan Stempleski." The Language Teacher, 11, 3-4.

日本語教育用映像教材

国立国語研究所『日本語教育映画基礎編』

国際日本語普及協会『日本語 (JAPANESE FOR BUSY PEOPLE) 』

国際交流基金『ヤンさんと日本人々』

国際交流基金『ヤンさんと日本人々—続編』

氏家研一『ビデオ講座日本語』

NHK放送研修センター『誰でも教えられる日本語：見る・聞く・話す』